



ゲート

自衛隊 彼の地にて、斯く戦えり

外伝4. 白銀の晶姫編〈下〉

α L P H α L I G H T

柳内たくみ

Takumi Yanai

アルファライト文庫



主な登場人物

Main Characters



リンガルナ

帝室と縁の深い
リーガー男爵家の令嬢。
レディの腹心の友。



ランドイフル

モルト皇帝の姪で
ピニャの従姉妹。
貴族社会に強い影響力を持つ。



伊丹耀司

35歳。
陸上自衛隊二等陸尉。
オタク趣味の持ち主。



エルベジョ・アレレイナ

26歳。レイの姉。
通称アルフェ。鉱物魔法を
専門に研究している。



フォイルマール

13歳。
フォルマル家の当主。
交易都市イタリカを治める。



テュカルナ・メルソー

167歳。
エルフ上位種族の娘。
金髪碧眼でスタイル抜群。



レレイナ・ラ

17歳。
ヒト種の賢者、魔導師。
頭脳明晰で無表情な少女。



ラオメルテ・メルテル

19歳。
有名な天才魔導師。
アルヌスでレイに師事する。



ホスマンソン・スマイル

アルヌスで学ぶ学徒。
師匠のレイに
想いを寄せる。



デヤオ・シロウ

317歳。
銀髪のダークエルフ。
妖艶な美女だが、とにかく薄幸。



マウリイ・マッキーユリー

963歳。
神エムロイに仕える巫神。
フリフリの黒ゴス神官服を纏う。



モルト・ソル・アウグスタス

帝国に君臨する皇帝。
日本との講和条約により
退位が決まる。



江田島五郎

海上自衛隊二等海佐。
特地に残留し
海洋情報を集める。



ハミルトン・ウノ・ロー

19歳。
ピニャに仕える副官。
長年ピニャを補佐し続ける。



ラビニャ・コ

21歳。
モルト皇帝の娘。
帝国の皇太女となる。

12

空を見ると分厚い雲があつて、小雪が風に舞ってチラついていた。

「こっちに來た時、日本が冬で良かったぜ」

「そうだな」

本格的な冬が到來したのだ。隊員達は外被をロッカーから出して着込んでいった。外では、伊丹のアイデアが採用され、滑走路を用いた石の成形作業が行われている。何台もの高機動車が動員され、縄でくくった石を引き摺っていた。

作業を行っているのは空自の隊員達である。滑走路を削るにしても、陸自の隊員に任せてでたらめに傷つけられては再建が大変になってしまう。

そのため彼らは、自らこの作業を手がけることで滑走路のアスファルトをまんべんなく削り、その後の再建が楽になるよう気を遣っているのだ。

そんな彼らの作業姿はたちまち街の住民達の噂となつて駆け巡る。猛烈な埃が舞う作

業のため、街の住民も何事かと注目していた。

「何やってるんだいあれ？」

「石を削ってるんだとさ」

街の住民達が野次馬となつて、空自地区を取り囲むフェンス前に集まっている。その中にはドム達職工の姿もあった。

「あんなやり方があったか……」

ホッフアは愕然としていた。

「俺達なんて、いらないうてことかよ！」

職工達は口々に悔しがった。罷業の是非はともかく、彼らは自分達の代わりになれる者はいないと考えていた。それだけにレイが何度も頭を下げることも、酷いと感じながらも優越感の刺激される心の潤いでもあったのだ。

だが、あっさりと別のやり方で代替されてしまった。自分達が無用になる時が来るなんて想像すらしていなかった。

「ドム、どうしよう!？」

ドムは、ホッフアの肩を叩きながら言った。

「安心しろホッフア。いくら石の成形ができたって、俺達が居なければ『門』は完成し

ない」

「でもよ、あいつらあんなやり方で、俺達なしでも仕事を進められるようにしちまったなら、もしかしたら、お前達の代わりになる何かだって考えついちゃうんじゃない……」

「安心しろ、それはない」

「本当か？」

「ああ。そもそもお前達の石工仕事が、いずれデカイ絡繰り機械に取って代わられることは俺は予想してたしな」

「そうなのか？」

「あの鉄の腕の付いた起重機……くれーんとか、とらつくの類を見てお前『便利だな』程度にしか思ってたが、俺はあれを見てヤバイって思ったぞ」

「はっ、それを言うならドム、貴様の仕事だっていづれ……」

「俺は、機械に取って代わられる程度の仕事はしてねえぞ」

「なんだと？」

「メソンの細やかな手仕事は、絡繰りなんぞにできる作業じゃねえんだよ。便利な道具つてのが出てきたとしても最後には俺達が必要となる。だからこそメソンは特別なんだ。分かるな？ 『門』は完成しないし、サンドラもお前の娘も無事ってわけだ」

「そ、そうか。なら……大丈夫なんだな？」

「ああ、安心しろ」

ホッファ達は、自分達の存在を無視されたことへの戸惑いと怒り、一方で安堵が混在した複雑な感情を持て余し、どう対処して良いのか分からないという顔つきで宿泊施設へと戻っていった。

だが一人残ったドムは、踵を返してもう一度フェンスにしがみついた。

でき上がった石のサイズを確認しているレレイの姿を見て、執念深いあの娘ならば何とかしてしまうのではないか、そんな悪い予感がドムの脳裏に走った。

「……ありえん。ありえないんだ」

ドムの呟きはホッファに言い聞かせた時の自信満々なものとは違い、自分に言い聞かせるようなものとなっていた。

「どうやら工事が再開したようですな」

石の加工作業が再開された様子を見る者の中には、ドム達以外にも苦々しい表情をしている者がいた。

アルヌス協同生活組合の地域支配人ベルライン、リュードー、ケイネスである。三人は

丘の頂の作業場まで上がってくると、レレイが学徒達とともに石への下書き作業を再開したのを見守っていた。

「これで『門』が完成するなら、我々にとってもレレイ様にとっても良いことだ。だが、肝心なメソン達が仕事に復帰しない以上『門』は完成することはない」とリュードー。

「いくらレレイ様が張り切っても、彫呪作業が止まっている限りは下書きのできた石が積み上がっていくだけなのだ。つまり、状況は何も変わってない。なのにどうしてレレイ様はそれを分かって下さらないのか？」とベルライン。

「なあ、リュードー。なんだってあの方はここまで『門』に拘るんだ？」

ケイネスは、舌打ちするとレレイの相談役に尋ねた。

「レレイ様は、責任感が強いからな」

「確かに『門』が完成すれば、今組合の陥っている苦境は一気に解決できる。ニホンからの品物は、大陸中どの国でもどの街でも、飛ぶように売れていく。だが『門』の再建に失敗したらどうなる？ 今やアルヌス協同生活組合に関わる者の数は、開拓村の民やその家族も合わせれば方に達する。彼らの生活を脅かすわけにはいかないのだ」とベルライン。

「組合が前のように小さい物だったら良かったが、ここまで大きくなったからには我々

の意見にもきちんと耳を傾けてくださらないと困る」とケイネス。

「私は、あの方の才能がこんなことで潰れてしまうのは、見ていられない」
リュドローはそう言って顔を伏せた。

「じゃあ、どうするのだ？」

ケイネスの問いにベルラインが言った。

「しばし休んで頂くのが一番だ。頭が冷えてくれば、聡明な方だけに状況が見えてくるはずだ。幸い旧コダ村の子供達や老人方も我々の考えに賛成して下さっている。彼ら過半数の賛同を得られれば、組合総会でお三方の解任はできる」

「その後は？ ジエイタイとの関係悪化は避けられないぞ」とリュドロー。

「気にはするのではない。彼らは我々から食糧を買い取れない立場なのだから」

「テュカ様やロウリイ聖下がお怒りにならないかな」

「確かに……特にロウリイ聖下を怒らせるのは恐ろしいぞ」

不安を漏らすケイネスとリュドローに、ベルラインは言った。

「いや、私は恐れないぞ……必要と考えたら、私は命を賭してでも諫言する。聖下が商いについてレイ様に一任しておられるのも、ご自分が商いごとに詳しくないとお認めになっているからだ。我が理を尽くして組合の現状を説明すればきつと分かって下さ

る。テュカ様とて同じだ。あの方も、組合が開拓民の生活を支えている現状を説明すればきつとご理解下さるはずだ」

「すると唯一の問題はカトー老師だけだな」とケイネス。

「あの方は最後にしよう。あの方は、レイ様を可愛がっている。我々が相談を持ちかけただけで、それをレイ様に全て話してしまいかねないからな」

「そうですな」

重役達はそんなことを言いながら丘を下っていったのだった。

* *

「隊長、後は彫刻だけつすね」

倉田は、伊丹と一緒に下絵の施された石を手動式パレットトラックで台車に載せながら言った。これを保管場所に整理して仕舞うことが今の伊丹達の仕事である。

「そうだな。なんとしてもドム達にストを解除してもらわないと」

「隊長。俺達でこれから先の作業、なんとかできないっすかね？」

「コンピューター制御のフライス盤でもあればな」

倉田は、台車の上に置かれた下絵の施された石の表面に軽く触れた。蟬に顔料を溶かし込んだものを用いているので、迂闊にひつかくとはげ落ちてしまう。なのでそっと触るだけである。

「問題はドム達がなんで仕事をしてくれないのか、だよ」

すると伊丹の手伝いに来ていた栗林が、拳をポキポキと鳴らしながら歩み寄ってきた。「二尉。こんなところでぐちぐち言ってる暇があったら、直接聞きに行ってみたらどうです？　なんだったら力ずくで口を割らせるって手もありますから、いつでも命令して下さいね」

その獐猛な表情に伊丹は慌てた。かつて栗林がゾルザルを嬉々としてボロボロにした光景が脳裏に蘇ったのだ。

「ば、暴力は禁止だぞ、栗ぼー。ドム達にだって、何か事情があるんだろうしさ」

「事情を理解して欲しかったらちゃんと話すべきでしょう」

栗林はそんなことを言いながら、シャドーボクシングでもするように拳をぶんぶん振り回した。

栗林は第三偵察隊の頃から付き合いがあるレイに同情的だった。だから事情も言わず仕事を放棄した石工達にたいそう腹を立てているのだ。

「確かに栗ぼーの言う通りんだけどね……でもね、黙ってないといけない理由が向こうにあったらどうすんの？」

「そんなことまで、こっちが斟酌する義務はありませんって。理解して欲しかったら話す。許容して欲しかったら頭を下げる。それが事情を持っている側の責務でしょ」

「ま、そうですね」

倉田も栗林の意見に概ね賛成のようである。

「でもさ、同じ事をするにしてももっと穏健な方法を考えようよ。痛いとか怪我させるのは後味悪いし」

「穏健って……どんな方法があるんです？」

「例えばそうだなあ……」

伊丹は、見習いのツムが作業場の近くにある図書館に入っていくのを見てほくそ笑んだ。

「そうだな……こんなのはどうだろう？」

仲間の半分以上が出て行ってしまったため、四十人にまでその数を減らした職工達は分宿を止め、宿泊施設に集まって寝起きしていた。

四十人が生活するには宿泊施設はあきらかに手狭だ。だが職工達はもう街の住民達からの冷たい視線に耐えられなくなっていた。

そのため可能な限り外に出ず、毎日の食事すらも使いに調達に行かせ、それをさくつと食べて済ませていた。

そんな食べ物の買い出しは、もっぱらツム達見習いの仕事だ。ドム達には批判的な目を向ける街の人間も、見習いにはまだ冷たくあたったりはしなかった。

ツムの方も饗めつ面した師匠達と一緒にいるのが居心地悪いのか、買い物と称して頻繁に外を歩く。朝に出かけ、夜に大量の食糧を抱えて帰ってくるのだ。

そして日中は駐屯地の図書館によく足を運んでいた。

乗合馬車の乗車証や駐屯地への入場証は失効していないので、一日の大半を絵草紙を眺めて過ごしている。

彼は既に絵を眺めて楽しむ段階を越え、わら半紙に向かってイラストを描き写すことに熱中するようになっていた。

もう少し経験値を積みめば、消費者としてのオタから、創るオタへとクラスチェンジしそうな感じなのだ。

「あ、まずい。そろそろ帰らないと棟梁にどやされる」

彼は西日が射すところに鉛筆を置く。

いそいそと同人誌数冊を本棚に戻し、乗合馬車の停留所へと向かった。だがこの日はいつもの時間の乗合馬車に少し遅れてしまい、次を待たなければならなかった。

「ヤバイよ。……遅くなると棟梁達怒鳴るからなあ。歩いて丘を下りた方が早いかな」
そう思って丘の麓を見下ろした時だった。停留所から少し横に入った路地に、本が一冊落ちているのを発見したのである。

その薄さ、大きさ、表紙に描かれた絵柄はまさしく同人誌であった。

「あれ？ どうしてこんなところに」

ツムは、駆け寄ると本を拾い上げた。

「こんなところにほっておいて、汚れちゃったらどうするんだよ」

彼は図書館でしかこれを開覧できない。だが自衛官達は借り出すことができる。

その待遇差を羨ましく思っていただけに、本を道端に落としていった誰かにツムは憤慨した。そして何気なく表紙をめくって凍り付くこととなった。

「こ！これは!？」

ツムは衝撃を受けた。

なんとそれは図書館のような施設には決して収蔵できないジャンルの本だったので

ある。

「す、すげえ……」

どんどん頁をめぐっていく。そして全ての頁をめぐり終えた時、我に返った。

「あつ……」

見れば、待っていたはずの乗合馬車が出発してツムの傍らを通り過ぎていく。それだけの時間が瞬く間に過ぎてしまっていたのだ。

「しまった……」

ツムは慌てて停留所に戻ろうとした。

だが、その時さらに前方に、もう一冊の同人誌が落ちているのを発見してしまった。

「あつ……あそこにも」

その誘惑にツム少年は勝つことができなかった。それを拾い上げて左右を見ると、また一冊、さらに一冊と同人誌がてんと落ちていく。

ツムは、それらを次々と拾っていく。そして何かに誘われるようにして、アルヌス駐屯地の無人の区画へと踏み込んでいったのである。

そして――。

「あつ」

懐にたくさんさんの同人誌を抱えて最後の一冊を拾い上げた瞬間、ツムの視界一杯に大きな籠が覆い被さって来たのだ。

「こ、ここは？」

真つ暗闇の中にどれほどの時間いたろうか？

意識を取り戻したツムは、自分が椅子に腰掛けた形で拘束されていることに気付いた。

「誰だ!? 僕を捕まえたって何も出ないぞ」

声を上げて叫んだものの、目隠しをされているため何も分からない。ただ、自分の声の反響具合から、ここが広い空間であり、屋内であることが何となく分かった。

どこかの聖堂？ あるいは倉庫？

ツムはこれまでの経験から照らし合わせてそう解釈した。

そして、自分を取り囲むように誰かの気配があることに気付いた。

「くそつ、ブザムだな！ お師匠の奥さんだけでなく僕まで捕まえてどうしようって言うんだ？」

「ブザムってのは誰のことだ？」

「ち、違うのか!？」

ツムの目隠しはすぐに外された。

目が眩^{くら}んだが、すぐにそこにいるのが誰であるかが分かる。

「あ、貴方は!?」

ツムの顔を覗き込んでいたのは伊丹であつた。その後ろには栗林と倉田がいて、ツムを捕らえるのに使用した大きな籠を壁に立てかけようとしていた。

「こんなもの、どこで手に入れたの?」と栗林。

「様式美つて奴ですよ。それにこの世界には段ボールがないですからね。野菜を入荷する時にこの手の籠を使つてるんですよ。知らなかったんですか?」

「知らなかった……」

そんな会話を背景に伊丹はツムに語りかけた。

「君のことだから、きつと引つかかってくれると思つたよ」

「な、なんでこんなことを!?」

「君に教えて欲しいことがあつてね。単刀直入^{たんていしつちん}に聞くよ。ブザムつて誰? それは君の師匠^{しせう}らが仕事をするのを止めてしまったことと関係あるのかな?」

「そ、それは……言えない……です」

ツムは顔を青ざめさせた。

「どうして?」

「だつて……僕が言つたらことが師匠に知られたら、破門^{はもん}されちゃう」

「ふむ。なるほど師匠から口止めされているわけか?」

伊丹は振り返ると、壁際にいた金髪エルフに視線を送つた。

「なら、テユカ」

「なあに?」

「ここは一つ、彼の意思に関係なく喋^{しゃべ}らせる方法を用いたらどうだろうか? そうしたら彼に責任はないということで、ドムも大目に見るしかないんじゃないかな?」

伊丹が示唆^{しそく}しているのは、以前テユカが伊丹に用いた精霊魔法を用いて過去を喋らせる手法である。するとテユカも怪しげに、それはもう芝居^{しばい}つけたつぷりに微笑みながらツムに近づいた。

「そうね。その手があつたわね……大丈夫よ。痛くしないから」

テユカが近づいてくるのを見てツムは叫^こんだ。

「ちよつと待つてよ! 魔法を使うなんて卑怯^{ひきょう}だぞ!」

「あら、何か問題なの!?」

「嫌だよ! 僕は絶対に喋らないからな。魔法を掛けようとしたら舌を嚙^かんでやる!」

少年の必死な形相を見た伊丹は、彼が脅しで言っているわけではないと気付いた。実際伊丹も、この年頃だった時に脳内を開陳させられたら、間違ひなく舌を嚙んでいただろう。何しろパソコンの中身を全て見られる以上の羞恥を味わうことになるのだから。

「困ったなあ、どうしたらいいと思う？」

「そうよねえ」

「よし、この手にしよう」

そこで伊丹が取り出したのは二本の羽箒だった。

「そ、それは？」

唾を呑み込むツム。

伊丹はそれを両手それぞれに一本ずつ持ちながら、その先端を怪しく揺すった。そして「さあ、どれだけ我慢できるかな」と言いつつツム少年の首元に近づける。

「ひ、卑怯だぞ！」

「そう。実は俺って卑怯者なんだ……だからこんな手口も平気で使う。だから君も安心して喋ってくれ。卑怯な拷問に耐えきれずに何もかも喋ってしまったとしても、卑怯な手を使われたんだから仕方がない。そう思わないか？」



卑怯、卑怯と何度も繰り返しながら、伊丹はいやらしげに笑う。そしてツムの襟元脇腹に羽箒をそよそよと近づけた。

「もし、こちらが聞きたいことを喋ってくれたら秘蔵の同人誌を君に進呈しよう。君が拾ったものも含めてね」

「えっ!? ホントに?」

「もちろんだ。さあ、いくぞ」

直後、狭い倉庫の中に、少年の悲鳴のような笑い声が大音量で響き渡ることとなったのである。

* * *

「……以上、報告終わります」

伊丹は、ツムを尋問して得た情報を速やかに狭間に報告した。

「と、いうことだ。諸君も我々の置かれている状況が理解できたかね?」

伊丹の報告を聞き終えた狭間は、会議室に集った佐官級幹部達を振り返った。すると健軍らは堰を切ったように溜まっていた疑念を口にした。

「要するに石工のストライキは、何者かの使囀による妨害工作ということなのですね?」
「はい、そういうことです。イタリカの政変も同一者の謀略である可能性が否めません」
江田島が答え、皆はどうしてお前が答えるといった表情をした。

だが、事が軍事の範囲を超えて政治的な要素が色濃くなると、狭間が江田島に相談するのは既に周知のことである。

江田島は永田町の意向について大変詳しいのだ。彼が特地にあえて残留したのも、政界から何らかの委託を受けてのことである可能性が高いと皆は見ている。

とはいえ自分達に情報が回ってこなかったことには、みんな不満を感じていた。それが江田島に対する複雑な心境含みの視線となってしまうのだ。

「もともとそんな疑念があったなら、どうして我々に伝えなかったのか?」
健軍は江田島に詰問の視線を浴びせた。

だが江田島は悪びれることなく返した。

「これまでの動きだけでは、我々に敵対的意図を持つ者がいるという確信が得られなかったからです。そんな状況で警戒を命じたら、隊員達が疑心暗鬼に陥ってしまうでしょう。それを恐れた狭間陸将は、私と伊丹二尉にだけ調査を命じられたのです」

「それを今、我々に示した。ならば相手の意図が判明したということで良いのだな?」

「はい。実態を掴むまでには到りませんが、彼らがこれまで行ってきたことから察すると、その位置と意図はおぼろげながら見えてきます。なので、少なくともあなた方には伝えておくべきだと陸将は決定されたのです」

江田島が慎重に言葉を選んでいることは健軍にも理解できた。特に大切なのは『敵』という言葉の使用を避けたこと。

そのため健軍は「敵は誰だ?」とは問わず、江田島が用いた言葉をそのまま用いた。

『彼』の位置とは?」

「おそらくは帝国。フォルマル家で政変を起こさせたり、帝国領内の村を襲ってその住民を人質にするなどといった手口から見ると、政界に相応の力を持つ者、あるいはその集団であるとして良いでしょう。『彼』の企図は、現段階では『門』の再建を阻むことです」

「ふむ。『門』さえなければ我々がこの世界で示せる力は限定されるからな」

「帝国は我が国の影響を受けずに済む。この世界の帝国を中心とした国際秩序が変更されることもない。その間に国力と軍備を回復させ、かつてのような覇権を取り戻そう……その何者かは、そう考えているというわけだな?」

「その上で、『門』との連絡を絶たれている我々となら、互角以上に勝負ができると考えたのかも知れません」

皆の言葉を聞いて、江田島はまだそれだけでは足りていないと、いくつかの条件を追加した。

『彼』が『我』の企図を妨げたい理由に、帝国政府内部の主導権を獲得する目的があると見ることもできます」

「帝国内部の政治抗争がこっちに飛び火したということか?」

『門』が開かれていない状態なら、帝国は日本と結んだ講和の条件のいくつかの履行を停止することもできますから」

健軍は江田島の言葉に首を傾げた。

「条約履行の停止? アルヌスを中心にした国境線を引いて領土は割譲されたし、賠償金だって毎月の支払いを受けているが……」

すると用賀が手を叩いた。

「ああ、鉱山などの採掘権がありましたね。採掘業者が入ってこなければいつまでたっても行使できないですもんね」

だが江田島はそうではないとばかりに人差し指を一本立てた。

「もう一つ、重要なことがあります」

「なんだ?」

「皇帝の退位です。講和条約によって、皇帝は退位することになっていますが、これはまだ実行されていない」

「まさか江田島……お前は今回の事件の背後に帝国のモルト皇帝がいると考えているのか？」

「可能性の一つとして考えています。これまでに起きた事象のいくつかを、誰が得をするかと考えて行くと、『彼』の正体がおぼろげながら見えてくるように思えるのです」

すると狭間が江田島を止めた。

「江田島君の危惧するところは理解できる。だが我が国と帝国は既に講和している。いたずらに相手国の元首に陰謀の嫌疑をかけることは避けてもらいたい。我々のこの状況判断が、誰かに誘導されている可能性もあるのだからな」

「分かりました」

江田島はすぐに頷いたが、用賀が確かめた。

「つまり、我々の側から帝国に対して敵対行動を取らせようとする謀略の可能性もあるということですか？」

「そうだ。諸君にも伝えておく。この問題への対処は慎重を要する」

「そうですね。今が有事なら、帝国に攻撃すれば済みますが、互いに矛を収め合った現

状ではいくら不満があっても、疑わしいというだけで直接的な力を行使するわけにはいきませんからね」

「そういうことだ。従ってこの話はこの場に居る者だけに留めておいて欲しい」

このアルヌスに政府機能が少しでもあれば、帝国と交渉したり様々な圧力をかけたりすることもできるが、この地には自衛隊しかなく、自衛隊にそうした権能はない。

自衛隊にできることはあくまでも自衛だけなのだ。

「この事態に我々ができる対処は限定的だ。『門』の再開通を急ぐこと、この一事に尽きる。我々はこれを全力で支援することにする」

すると伊丹が言った。

「問題はどうかと思ったら石工達に働いてもらえるかです。彼らの家族が人質になっている限り『門』の再建工事は止まったままです……」

「それなんだが、別の石工を雇うってのはダメなのか？」

当然のように出てきた質問に、既に様々な対応策を検討していた江田島が答えた。

「その方法も考えましたが、石工を雇うのを邪魔されたり、新たに雇った石工の家族がケルン村の連中と同じようにされてしまう可能性もあります」

「なら、部隊を派遣して石工の家族を救出しよう」

「ケルンは帝国領内ですよ」

「我が国と帝国との間には既に和平は成立してる。故に国境を越えることはできない……か」

「なら、別の石工を雇うことにして、その家族を保護したら？」

皆が「それがいい」と頷いた時、伊丹が再度議論に口を挟んだ。

「すみません、腕の良い石工で暇にしている者はそうそう居ないようで、仕事を依頼しても来てもらえないのは先になってしまっうんです」

すると特殊作戦群の出雲が立ち上がった。

「我々の出番のようですね」

だが狭間は幹部達に落ち着くよう求めた。

「うむ。必要とあらば出雲君達を使うことにも躊躇いはない。だが、人質がどこに囲われているか分からない状況ではまだ早い。まずは『彼』の実態を掴むことが先決だ」

「そもそもケルンっていうのはどのあたりなんだ？」

発せられた問いに答えるべく情報幹部の一人が立ち上がったて地図を広げ、帝都から南南東方向にある一点を指差した。

「ここです」

「人質が監禁されてそうな場所は……さすがに分からんか」

「見たところ、周りには何にもありませんからね」

「帝国の交通事情や捕虜の数などを考えると、ケルンから大きく移動しているとは考えにくい。女子供が人質に含まれているなら、体力的に三日歩かせたとして最大で九十キロメートルくらいですか。……ケルンを中心にしてその範囲のどこかに拠点が設けられていると考えてよいでしょう」

地図に描かれた半径九十キロメートルの円を見て、皆が鼻白んだ。

搜索しようにも何週間、何ヶ月もかかるほどの広さだったからだ。

しかもそれとて人質の健康を大きく損ねないよう犯人側が配慮していた場合だ。敵方がそういうことを気にせずデスマーチを強行したら、搜索範囲はどこまでも広がる。

「広大な」

情報幹部は答えた。

「はい。従って現地に人をやって調べるという方法では成果は得られないでしょう。こういう場合は捌め手から手繰っていくのが一番かと思われます。『彼』が帝国の政界に影響力を持っていると推測できるなら、そこから調査を進めるべきです。それと街に入り込んだブザムとかいう工作員の搜索ですか？ これは街の民宿を調べていけば見つ

けられるでしょう」

「民宿に泊まらずに新参の商人の家に泊まっていたらどうする？」

「では探しても無駄ですか？」

「工員が本名で宿泊しているとは思えないからな。それなら住民調査とかそういった手続きにかこつけて、片っ端から調査していった方がいい」

「前々から話の出ていた、世帯連絡カードですね……やりますか」

警務隊の幹部が呻くように言った。

世帯連絡カードとは、交番の警察官が各家庭を回って住民構成や連絡先を聞いて記録するカードのことである。

自衛隊の秩序維持が職務である警務隊がそんな情報を収集することなどあり得ないのだが、警察組織がない以上は警務隊がこれをするしかない。

幹部達が情報幹部の意見に頷いた時、狭間は決断を下した。

「結論は出たようだな。では、まずは通常の外交的措置から講じていくことにする。帝都の菅原君と連絡を取ってくれたまえ。それと帝都の悪所事務所にもな……」

* *

かつてゾルザルが皇太子府を開いた時、彼は自分に従う文武の官僚や将軍らを集めて盛大な式典を行った。自らが権力を掌握して国政を壟断することを内外に示すためである。

だがピニャは皇太女府を開設する段に進んでも、派手な催しを行うことは避けていた。彼女は父からの権力委譲を受けるのにも慎重で、全てを刷新するのではなく、これまで政務を司っていた大臣や官僚をできる限りそのまま留任させようとしていたのだ。

それはつまり、父の政策方針を可能な限りそのまま引き継ぐことを意味する。ピニャとしては帝国に大きな変化をもたらしたくなかったのだ。

その理由は、すでに帝国が大きな変化を経験していたからだだった。

異世界との戦いに敗れ、ゾルザルの圧政、帝権擁護委員会による思想弾圧、それに続く国を二分する内乱。

さらにこれが終結すると皇帝は、元老院と貴族階層に、功績有る亜人種達を大量に迎え入れたのである。

これらは、これまで帝国を支えてきた伝統貴族や元老院議員達にとってあまりにも大きな変化であった。帝国の貴族社会は未だにその衝撃を受け止めきれず、揺れ動いてい